

第一三話

酒顛童子退活事 下

『前太平記』上 卷第廿 三九八頁から四〇九頁より

[酒顛童子討たる]

皆さんは、「このようにまで成し遂げているのに、あの曲者に見られ不審に思わ

「斯くまで仕をほせたるに、

彼癖者に見怪しめられ、

れ、時を過ごすのは安心できない。このような様子で蔀_(老)一枚を、蹴破って出るこ

時剋を遷さん事こそ安からね。

是体の蔀一重、

踏み破って出でん事こそ

とはとても容易いが、もしその音に目が覚め、酔って寝ているものたちが一斉に起

最易けれ共、

若し其音に驚き、

酔ひ臥したる者共、起き合はせば、

きるならば、任務は思い通りにはいくまい。どうしようか」と思ったが、頼光は、

事自在なるまじ。

如何はせん」

「人はおられるか。非常に酔って苦しいですので、水を一杯(いただけますか)」とお求めになると、例の曲者はまだ寝もしないで、童子の枕元で警備の様相で座っていたが、すぐに器に水を入れて持ってくるのを、頼光はキッと目くばせをなさる

頼光屹と目合せし給へば、

と、公時がさっと寄って取っ組み合った。このすきに皆さんは童子の寝室に入り、

公時つと寄つて引つ組んだり。

仰向けに寝ている腹の上に、頼光が飛び乗って、「どうしたのか酒顛。国の中の果

「何にや酒顛。 率土の内に在りて、

てにいて、王命に逆らい、民草を苦しませたその罪を正すために、源頼光が勅命を

王命を背き

国人を悩ませし其罪を誅せん為、

源頼光勅命を蒙り、

受け、今討たれるのだ」と、胸元に二本の刀を刺す。童子はこれに目を覚まし、跳

唯今誅戮せしむるなり」と、 心もとに二刀刺す。

ね返そうとするところを、保昌・渡部・卜部・碓井が、手足を押さえ身動きをさせ

ない。童子は敵わない様子になって、「集まれ皆のもの」と、山が崩れるような声

を上げて、何度も呼び叫んだところ、酔って寝ていた家来たちは、驚いて目が覚め

て立ち向かおうとするところを、公時は例の曲者をくいとめて、首を切って捨て走

って、駆け出てきたが、この様子を見て、童子の方には目もくれず、中に入り込も

うとする者たちを立ち入らせまいと薨一枚を踏み外して、楯として扱って、四、五

人が攻め入ろうとするのを、掛け声を出して押し返す。これに遮られて揉みあう間

に頼光は、童子の首を切り落としなされると、首も体も生きているかのように目をむ

き出し齒軋りをして、手足をバタつかせもがき苦しんだが、保昌・綱・季武・貞光

が、突き貫き、ずたずたに斬ってしまった。首は、源氏の重宝鬼丸という太刀で、

刺し貫いておきなされると、すぐに齒軋りもやんでしまった。保昌と四天王は、刃先

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵／<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

を揃え切って回った間、童子が手足と家臣と信頼している家来八人と、その他の下
っ端二十人余り、一人も残らず討ち取った。頼光がおっしゃったことは、「あの案

「彼案内して

内してくれた者を都に連れて、恩を返そう」と言って、捜し求めたが、とうとう見

得させつる者を都に具して、 恩をも報はめ」

つからなかった。また、去年や今年、童子のせいでたくさんの人が捕らえられたと
聞いたために、助けてあげようと思って、松明を燃やして岩屋の中を隅々までお探
しになったが、生き残っているものは一人もいなかった。

【頼光主従下山す】

こうして皆さんは岩屋をお出になり、天田郡^(貳)にご到着になると、代々仕える家
臣たちが皆大将のご体調が心配に思い、あちらこちらに十、二十騎、出てくるのを
お待ち申し上げた者たちが二百騎ほど、皆さんが無事である様子を拝見し、喜び合
ったことはこの上ない。すぐに着替えの御召し物、御馬などを差し上げたところ、
それぞれ衣服を変え、今日はここに宿泊して、京都へ早馬を参らせ、鬼退治の次第
を奏上し、多田へも飛脚を走らせて、この旨を報告される。また、丹後国司の藤原
経教卿の元へ、渡部綱を申し含め向かわされたことには、「この度千丈が嶽の鬼

「今度千丈が嶽の妖鬼、

を、頼光が宣旨を受け参り向かって、差し障りなく退治させ終えた。後日の検分

頼光宣旨を蒙り、罷り向かつて、 事故無く退治せしめ畢んぬ。 後日の検証に、

で、岩屋の様を調査してくださいませ。案内には綱を従えてください」と言って派

岩窟の様実検ありて 給はり候へ。 案内には綱を具せらるべし

遣なされた。国司はとても驚いて、すぐにその軍勢五百騎余りを、渡部を先に立てて例の岩屋にお入りになると、すっかり殺されて、算木^(参)を散らしたかのように倒

算を散らせるが如く

れ伏せっている。国司はまた綱に使者を付き添えて、源氏の武徳に感心し、皆さん
倒れ臥したり。

の無事な様子をお祝いになった。

氏の武徳に感心し、皆さんの無事な様子をお祝いになった。

注釈

※壺・葩……格子(こうし)の裏に板を張り、引き上げれば釣り金具でとめられるようにした戸。

※弍・天田郡……現福知山市の大部分。大江山を擁する大江町は加佐郡。

※参・算木……和算の計算用具。3~14cmの木製または竹製の細長い直方体。鬼たちが散らばった算木のようだと表現されている。

酒呑童子の首が落ちました。

うーむ、やはり『前太平記』の酒呑童子退治は源頼光の称賛の側面が大きいなあ。酒呑童子が頼光公を罵らない。藤元にとってあのセリフは不要だったのか、それとも地元にはそんな言葉は伝承されていなかったのか。それで事務的な面も大きく感じる。

公時の働きが今回は大きいですね。脳筋には変わらないかもしれないけれど、状況判断のうまい人物に感じます。

地図は次かその次くらいにまとめますね。20巻の背景は酒呑童子の落ちた首をイメージして椿と刀の画像をお借りしました。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2017/7/24

改訂：2021/3
海熊童子